

# 浦賀文化

令和5年(2023年)1月1日

第72号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

## 上ノ台遺跡

この遺跡は、縄文・古墳時代の遺跡で、埋蔵文化財分布調査中に発見された。鴨居二丁目の緩やかな傾斜をもつ台地に所在した。



ある標高四〇〜五〇mの『ウェンデー』と呼ばれた小高い台地で、とても見晴らしのよいところ。東を見れば東京湾のみならず対岸の房総半島を、振りかえるとかつて水田だった谷を隔てて小原台の台地に広がる住宅地が望めます。後述しますが、実はこの立地がこの遺跡の重要なポイントとなります。

浦賀コミセン分館の二階展示室前に『上ノ台遺跡考古資料』と書かれたショーケースがあり、中にはさまざまな土器や石器が展示されています。これらは、平成二三年(二〇一一年)三月の上の台中学校の閉鎖に伴って移されたといえます。

この遺跡からは、弥生時代中頃から古墳時代初期(二〇〇〇年〜一六〇〇年前)にかけて建てられた住居跡が多く発見されています。その数なんと一四一軒。もちろん、すべてが同時に建てられたわけではなく、一〇軒から二〇軒と、時代によって増減がありますが、四〇〇年もの間、途切れることなく続いたムラであったと考えられます。発掘を進めていくと、家が建てられている場所が限られていて、しかも、家の一部分が重なって出てくるのが幾度もありました。もちろん同時に建てられたわけではありません。建てられた時期や順番は、地層断面や残された土器片などから知ることができそうです。また、家の形には流行があり、平面図(上から見た形)から家の形が楕円形↓円形↓四角形へと変化してい

浦賀駅から鴨居方面へバスで一〇分、山田口バス停で下車し一八〇段余の急な階段を上りきると上の台中学校グラウンドがあります。上の台中学校は、鴨居地区の人口増に伴い建設されましたが、三一年間幾多の卒業生を世に送り閉校しました。ここは、鴨居小や鴨居の浜の近くに

ることがわかったことは、この調査の大きな成果でした。「農耕が発達し、鉄器の使用が始まった」とあります。

弥生・古墳時代という「農耕が発達し、鉄器の使用が始まった」とあります。火災にあつた住居址より、炭になった米粒が一万粒以上も見つかっていることや、鴨居の海で使われたであろう釣り針や刀子(ナイフ)などの鉄器類が出ていることから、この時代の典型的な遺跡であることがわかります。そして、この地に住む人々が豊かな海や陸の恵みを受けていたことを知ることができ

それにしても、なぜこのような場所に人々が永い間住んでいたのだろうか。住みやすさの他に、この地には何か秘密があるのではないかと。目をつけたのは対岸に房総半島を見渡せるこの立地。古代の官道(古東海道)の三浦半島から房総へ渡る海上航行の拠点がこの辺りにあつたのではないかと。おそらく、鴨居の浜辺りから船で房総に渡っていたのであろう。

お隣の走水に伝わる、「弟橘媛伝説」もこのことを裏づける逸話ではないかと思われま

昔の旅人にとって、海を渡ることは大変で、それを解決してくれるのが地元の漁師たち。そんな人たちが暮らしていたところが、この上ノ台のムラでした。そのことから、横須賀地域の

東京湾側で最大規模の重要な遺跡であったといえるでしょう。

また、発掘を担当した横須賀考古学会(会長赤星直忠氏)によって毎週のように発行された『発掘調査ニュース』や、何度も企画された体験発掘などを通して、地域への積極的な普及活動があつたことも忘れてはなりません。(仲野 正美)

※弟橘媛伝説:  
ヤマトタケル東国征討の際、浦賀水道を渡り房総へ船で渡ろうとしたが、荒れ狂う海に進退窮まってしまう。そこで、妃であるオトタチバナヒメが海に身を捧げて海の神の怒りを鎮めヤマトタケルを助けたという哀しく美しい伝承。日本の神話。



上ノ台遺跡から鴨居港、房総を望む

★参考資料  
・「鴨居上ノ台遺跡」  
横須賀市文化財調査報告書第8集  
「うえのだい」  
横須賀考古学会



# 歴史語りい座

## 浦賀奉行所編 その二十二

郷土史家 山本 詔一



### ●「咸臨」出航●

安政5年(一八五八年)六月、日米修好通商条約が結ばれ、この条約の批准を交換するため、幕府は新見正興を正使とする使節団を派遣することになった。この使節団はアメリカが用意した軍艦ポーハタン号で行くことになった。

ポーハタンの随伴船として「別船」を派遣する提案が、浦賀奉行を経験し、後に外国奉行になっていた水野忠徳らから出され、その乗組員の候補に、江戸に開設された軍艦操練所の教授陣があがった。その大半は、長崎伝習所に学んだ浦賀奉行所の役人であった。

この別船の選定は二転三転し、最終的に「咸臨」となった。咸臨は幕府がオランダへ発注した新造の蒸気軍艦であったが、太平洋を横断するにあたり、浦賀でドックすることに

なった。この時のドックの場所であるが、『近世造船史』には、「浦賀港へ注ぐ長川の河口を改良し、壁面には粘土を塗ってわき水を止め、手動のポンプで排水をするドライドックを築いた」と記されている。このことから、長川河口が日本で最初のドライドックであり、その最初の船が咸臨であったといえるであろう。ただ、咸臨以前に浦賀で修理をし

た幕府軍艦はいずれも、港奥の中堀を使用しており、なぜ咸臨だけがとの疑問も残る。

咸臨の修理を担当した浦賀奉行所の役人たちは「えっ、これが新造船なのであるうか」という疑問をもった。というのも、内部に使用されている木材の多くは使い古されたものであり、なかには、中国の宮殿の棟木やたる木に使用されていたのではと思わせる彫刻や朱に塗られたものを削り落としたような材木もあつたからである。この件に関しては、後日、アメリカのメーア島でドックした咸臨に対し、アメリカ人技師たちもオランダの不誠実な造船方法を指摘している。一方、浦賀で修理した「コーキング」と呼ばれる船板と船板のすき間からにじみ出てくる水を止める工事に関しては絶賛されている。

こうした工事が終わり、咸臨派遣のメンバーが選出され、司令に軍艦奉行の木村撰津守喜毅、艦長に勝海舟が選ばれた。浦賀奉行所からは、運用方に佐々倉桐太郎、浜口興右衛門、蒸気方に山本金次郎、岡田井蔵の四名が選出された。その他に、通訳として中浜(シヨン)万次郎や鼓主の名目で福沢諭吉らが乗り組み、日本人は総勢九六人が乗り込んだ。安政七年(一八六〇年)一月一三日、品川を出航、横浜でアメリカ海軍の

ブルック大尉ら一名を乗せ、浦賀へ入った。浦賀では薪・水・野菜などの調達が行われた。特に水の積み込みには時間がかかり、水船以外にも漁船などの応援を得て、1升ビンにすると6万4500本分の水を積み込んだ。それでも、一日一人あたり二升五合の使用量であり、節水を呼びかけている。

この代金として、東西の村より一五両余が請求された。奉行所が高さに驚き再提出を求めた結果、一両余が村に支払われている。

こうして一月一八日浦賀を出航した咸臨は太平洋を横断し、五月五日に無事浦賀へ戻ってきた。

※鼓主：太鼓を打つ係

### 俳句の散歩道

朽ちかけし遊女地蔵や螢草

鈴木 ひろ

鬼やんま砲臺跡をパトロール

大塚 遊球子

紙面全面リニューアルに伴い、各コーナーを終了いたします。次号をお楽しみに！

## 青い目の人形展

### 一満貫に残る人形の記憶一

浦賀地域に残されている青い目の人形に関する写真や資料をパネル展示します。

ギャラリートーク&ビデオ観賞会

1/8(日)・1/9(月)  
14:00~15:00

期間：12/10(土)~1/9(月)  
(但し 12/29~1/3は休館)

会場：浦賀コミセン分館



(ぼじぶ)



笑う門には福来る!

### 笑話一題

年越し蕎麦の思い出  
二年前に亡くなった義母は天ぷらが大好きで、年越しも蕎麦と天ぷらの盛り合わせと決まっていた我が家。  
もう十年程前のことになりましたが、例年通り家族揃って蕎麦を食べている時に、ひたすら海老の天ぷらだけを食べている義母を見た主人が「みんなの分もあるのだから考えて食べてよ」と声を掛けたところ「私はそんなに食べてない」と反論。ちよつと空気が悪くなりました。「それなら皿に残っている尻尾を数えてみて」と主人。なんと尻尾は七尾分ありました。認知症だった義母の、心当たりがないだけども、と言う様な表情が可笑しくてみんなで大笑いとなって、この日はめでたし、めでたし。

在宅介護は笑って過ごせることばかりではなかったけれど、このエピソードは何年経っても思い出してはクスツと笑ってしまう義母との大切な思い出です。きつと今年も年越し蕎麦を食べる時は思い出して笑うのだろうなあ。

URL 変更になりました

<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2752/uragabunka/>  
浦賀文化のバックナンバーはこちらから→



浦賀文化